

ゲーテの「歓迎と別離」の成立と解釈

メタデータ	言語: Japanese
	出版者: 大阪市立大学文学会
	公開日: 2024-09-09
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 森川, 晃卿
	メールアドレス:
URL	所属: 大阪市立大学
	https://doi.org/10.24544/ocu.20180221-086

ゲーテの「歓迎と別離」の成立と解釈

森 川 晃 卿

「歓迎と別離」(Willkommen und Abschied)はチェンバレン^①(Houston Stewart Chamberlain)の言うように、「ゼーゼンハイムの歌」(Die Sesenheimer Lieder)の中では、ゲーテのフリデリーケに対する熱情が最もよくあらわれているばかりでなく、「五月の歌」(Mailed)と共に、古い文学の因習と停滞を見事に打破った詩である。この詩がいつ作られたか正確にはわからない。おそらくは一七七一年の春か夏であろう。^②いわゆる「ゼーゼンハイムの歌」の中、大部分は一八三五年に当時学生であったクルーゼ(Heinrich Kruse)がエルザスのゲーテの跡を訪ねた折に、フリデリーケの姉ゾフィーのもとで、フリデリーケの遺品の中からゲーテ及びフリデリーケの筆跡の詩を示されて、彼が自分で写しとったのである。その他に一つゾフィーの記憶をたどって書きとったものがあつた。しかし、この時クルーゼが筆写したものの中には、ゲーテの詩の他にレンツ(Jakob Michael Reinhold Lenz)の詩も交っていた。レンツはゲーテがゼーゼンハイムを去った後、同地の近傍に居を移し、フリデリーケと近づき、後年「ゲーテの猿」といわれた詩人であつたが、後にゲーテのものかレンツのものかという論争がたたかわされて、ゲーテの「ゼーゼンハイムの歌」は確定したのである。^③「歓迎と別離」がフリデリーケの遺品の中から発見せられたという事実によって、この詩がゼーゼンハイムの恋愛の最中に作られたとはにわかに断定はできない。例えば、フリデリーケの遺品の中から出た詩の中には、彼女がゲーテと知り合う以前のものもふくまれていた。^④ゲーテがフリデリーケと知り合う以前の詩をたまたま恋人に与えることはあり得ることである。しかし、「歓迎と別離」がゼーゼンハイム体験によって書かれたことは動かない事実であつてみれば、フリデリーケとの恋愛が成熟していった、やがて破局に向わねばならなかった時期、つまり、前記の一七七一年春か夏ということになるであろう。フリデリーケが保存していたのは、この詩の最初の十行だけであつて、四節から成るこの詩全体は一七七四年十二月一日にゲーテがヤコビ(Friedrich Heinrich Jacobi)の編集するイリス誌(Iris)に発表するために送り、一七七五年同誌三

月号に発表せられたのであるが、その時には未だ「歓迎と別離」という表題は全然付けられておらず、表題の代りに横線が引いてあるだけであつた。フリデリケの保存していた十行、つまり、クルーゼの写本とイーリス誌所載の最初の十行の間には多少の相違はあるが、根本的な差異は認められない。それよりもゲーテが一七八九年にはじめて、彼の著作集にとり入れた時に企てた変更は極めて重要であつた。そして、この時に、はじめて表題として、*Willkomm und Abschied* が付された。それが、一八一〇年のゲーテの著作集において、今日のような表題 *Willkommen und Abschied* となつたのである。さて、クルーゼの写本にある最初の十行は次の如くである。

*Mir schlug das Herz ; geschwind zu Pferde,
Und fort, wild, wie ein Held zur Schlacht !
Der Abend wiegte schon die Erde,
Und an den Bergen hieng die Nacht ;
Schon stund im Nebelkleid die Eiche,
Ein aufgethürmter Riese, da
Wo Finsterniß aus dem Gesträuche
Mit hundert schwarzen Augen sah.
Der Mond von seinem Wolkenhügel
Schien kläglich aus dem Duft hervor ;*

これがイーリス誌所載の折には、一行目の *Mir schlug das* が *Es schlug mein* となり、六行目 *Ein aufgethürmter* が *Wie ein gethürmter* に、九行目 *seinem* が *einem* に、十行目 *Schien kläglich* が *Sah schläfrig* に代つてゐる。では、なぜフリデリケの筆が第十行目、つまり、第二節第二行目まで止まつてゐるか、これについてバウムガルト (Hermann Baumgart) は、『元来彼女の方に属すべきものを筆にすることを強い内面的な反抗心が許さなかつた』^⑤とし、すでに、第二節最後の二行の燃えるような、情熱的表現が彼女の筆をにぶらせたのだと言ふのであるが、これも一つの見解であらうが、これを論証する証拠はなにな一つ残っていない。では、イーリス誌所載のものと一七八九年の著作集のものとを比較しよう。

Frühere Fassung

Es schlug mein Herz. Geschwind, zu Pferde !
 Und fort, wild wie ein Held zur Schlacht.
 Der Abend wiegte schon die Erde,
 Und an den Bergen hing die Nacht.
 Schon stund im Nebelkleid die Eiche
 Wie ein getürmter Riese da,
 Wo Finsternis aus dem Gesträuche
 Mit hundert schwarzen Augen sah.

Der Mond von einem Wolkenhügel
 Sah schläfrig aus dem Duft hervor,
 Die Winde schwängen leise Flügel,
 Umsausten schauerlich mein Ohr.
 Die Nacht schuf tausend Ungeheuer,
 Doch tausendfacher war mein Mut,
 Mein Geist war ein verzehrend Feuer,
 Mein ganzes Herz zerfloß in Glut.

Ich sah dich, und die milde Freude
 Floß aus dem süßen Blick auf mich.
 Ganz war mein Herz an deiner Seite,
 Und jeder Atemzug für dich.
 Ein rosenfarbes Frühlingswetter

Spätere Fassung

Es schlug mein Herz, geschwind zu Pferde !
Es war getan fast eh gedacht.
 Der Abend wiegte schon die Erde,
 Und an den Bergen hing die Nacht ;
 Schon stand im Nebelkleid die Eiche,
Ein aufgetürmter Riese, da,
 Wo Finsternis aus dem Gesträuche
 Mit hundert schwarzen Augen sah.

Der Mond von einem Wolkenhügel
 Sah *kläglich* aus dem Duft hervor,
 Die Winde schwangen leise Flügel,
 Umsausten schauerlich mein Ohr ;
 Die Nacht schuf tausend Ungeheuer,
 Doch *frisch und fröhlich* war mein Mut :
In meinen Adern welches Feuer !
In meinem Herzen welche Glut !

Dich sah ich, und die milde Freude
 Floß von dem süßen Blick auf mich ;
 Ganz war mein Herz an deiner Seite
 Und jeder Atemzug für dich.
 Ein *rosenfarbnes* Frühlingswetter

Ich sah dich, und die milde Freude
Fließt aus dem süßen Blick auf mich.
Ganz war mein Herz an deiner Seite.
Und jeder Atemzug für dich.
Ein zärtliches Gefühlswetter

Ich sah ich, und die milde Freude
Fließt von dem süßen Blick auf mich;
Ganz war mein Herz an deiner Seite
Und jeder Atemzug für dich.
Ein zärtliches Gefühlswetter

Lag auf dem lieblichen Gesicht
Und Zärtlichkeit für mich, ihr Götter,
Ich hofft es, ich verdient es nicht.

Umgab das liebliche Gesicht,
Und Zärtlichkeit für mich—ihr Götter!
Ich hofft es, ich verdient es nicht!

Der Abschied, wie bedrängt, wie trübe!
Aus deinen Blicken sprach dein Herz.
In deinen Küssen welche Liebe,
O welche Wonne, welcher Schmerz!
Du gingst, ich stund und sah zur Erden
Und sah dir nach mit nassem Blick.
Und doch, welch Glück, geliebt zu werden,
Und lieben, Götter, welch ein Glück!

Doch ach, schon mit der Morgensonne
Verengt der Abschied mir das Herz:
In deinen Küssen welche Wonne!
In deinem Auge welcher Schmerz!
Ich ging, du standst und sahst zur Erden,
Und sahst mir nach mit nassem Blick:
Und doch, welch Glück, geliebt zu werden!
Und lieben, Götter, welch ein Glück!

この両者の相違は着目すべき重要点である。シュトゥルム・ウント・ドラング (Sturm und Drang) を経過したゲーテは、大胆にすぎた Hyperbel (誇張) をさせて、これを和げようとしたのである。情熱の嵐が過ぎ去ってみれば、殊に一七八九年といえはゲーテがイタリーへ旅行した年でもあったので、右の改作は当然のことかも知れない。しかし、それだけまた、この詩の持つシュトゥルム・ウント・ドラング的な沸騰が緩和されて、その特色がややうすれたとも言い得よう。例えば、旧稿第一節第二行 Und fort, wild wie ein Held zur Schlacht (そして、進め、戦いに向う英雄のごとく、荒々しく) が Es war getan fast eh gedacht (思うまもなく立ち出でぬ) と和らげられ、第二節六行目 tausendfacher frisch und fröhlich (さわやかに、楽しく) と改められた。tausendfach (幾千倍の) の比較級が tausendfacher であって、前の行の Die Nacht schuf tausend Ungerneuer (夜は幾千の怪物を創れど) を受けて《わが勇氣それにもまして幾千倍ぞ》となっていたものを、《わが心さわやかに、楽しく》と改めたのである。次の二行、Mein Geist war ein verzehrend Feuer (わがいがき焼きつくす火となり) / Mein ganzes Herz zerfloß in Glut (わが心すべて燃ゆる火となる) が In meinen Adern welches

Feuer! (わが血脉になんという火が!) / In meinem Herzen welche Glut (わが胸内に燃ゆる火が!) と改められ、前者の verzehrend や zerfloß が持つどぎつい表現がさけられて、咏嘆的な、従って、やや客観的観照の句が選ばれたのである。ゲーテの人間の成長を思い合わせずにはおられない。第三節第一行 Ich sah dich は Inversion (倒置) をえて Dich sah ich となったのは第三節において場面が一転して再会歓迎となる第一行目であって当然のことと思われる。第三節二行目前置詞 aus が von に置き換えられたが、aus が一定範囲の場所から内発することを意味するに反し、von がただ一般的な出発点を示すところから、後者が選ばれたのであろう。同じく第三節第六行目 lag が ungab (つつんだ) に代ったが、lag がより直接的な表現であって、やや固定的なのに比較して、成熟した技術をもって ungab と緩和して、客体を動きとしてとらえようとしたのである。第四節、別離の情景の改作は個々の字句の訂正に止まらず、かなり徹底的に行われた。特に、第五、六行の改作は全然立場が反対にさえなっている。即ち、Du gingst, ich stund und sah zur Erden / Und sah dir nach mit nassem Blick. が Ich ging, du standst und sahst zur Erden, / Und sahst mir nach mit nassem Blick. となっている。これは主客を転倒しただけであるが、前者の情景が異様なとらえ方であるに對して、後者は別離の情景としては正常になったと言い得よう。しかも、最後の二行への結びつきは、ツォルンツ (Erich Trunz) の言うように、旧稿の方がはるかにおさまりがいいのではないか。つまり、ゲーテはこの詩句を正調に引戻すことによって、やや最後の二行とのつながりの効果を失したと思われる。更に第四節第三、四行目の改作は後者において対位法がとられ、Küssen と Auge, Wonne と Schmerz が対比しているのであるが、旧稿のもつ力強さが、やや説明的になったと言われよう。以上のようにイーリス誌所載のものと著作集のものとの間には時代の距りと共に、ゲーテのシュトゥルム・ウント・ドラングから古典主義文学への推移さえもが窺われるのであるが、一方、著作集において、変更が加えられて、クルーゼの写本に戻った詩句がある。例えば、第一節第六行 Ein aufgetürmter Riese (塔なす巨人のすがた) がイーリス誌では、Wie ein getürmter Riese (そびえ立つ巨人のすがたの如く) となっていたものを、クルーゼ写本の通りに、wie をけずって、同格名詞とし、その代り aufgetürmter という複合動詞の過去分詞を使って、力強い表現に戻している。同様に、第二節第二行目 kläglich (悲しそうに) が schläfrig (眠たげに) に代っている。これなども、第二節第六行 frisch und fröhlich との対比の効果が考えられての改作と思われる。

その代り、*ausserordentlich*（超絶な）が *schmerzhaft*（痛ましい）に代つてゐる。これなども、第二篇第六行 *trauch und reulich* との対比の效果が考へられての改作と思われぬ。

このようにして、定稿となった「歓迎と別離」はゲーテのゼーゼンハイムの思い出と密接に結びついてゐた。それ故に、六十才のゲーテはこの詩をフリデリーケに贈つたことを思い出し、ゼーゼンハイム訪問と結びつけたのであろう。「詩と眞実」第十一章のはじめに一七七一年復活祭の休日を利用したゼーゼンハイム騎行を次のように描写している。《私はできるだけ早く馬の用意をし、こざっぱりと身仕度を整えた。ワイラントのところへ使者をやったがいなかった。それが私の決心を阻止しなかった。ただ遺憾ながら、仕度に暇どつたために、希望通りに早く出発し得なかった。馬を急がせたけれども、遂に夜が迫つてきた。道を間違えることはなかった。なぜなら月は私の热情的な企てを照らしていたから。風があつて怖ろしい夜であつた。私は明朝まで彼女と会うことを引きのほすことのないよう、馬をとばした。》疑いもなく、この短い散文は「歓迎と別離」につながつてゐるのだが、体験しなかつたこととは一行も書かなかつたというゲーテではあるが、「歓迎と別離」の細部に至るまである一定の時のフリデリーケ訪問と関連があるのかという疑問に対しては明らかに否である。ゲーテの詩がすべて機会詩であることは肯定するにしても、狭義のそれではない。例えば、「歓迎と別離」の季節であるが、一七七〇年の秋は、はじめてゲーテがフリデリーケを知る機会を持った頃であり、当然、別離とは未だ関係がない。それどころか、十月十五日付のゲーテのフリデリーケへの手紙は、数日間にあつたゲーテのフリデリーケ初訪問によつて、彼の心が完全に彼女のものになつてゐたことを示している。《別れることが、僕にはどれほど悲しかったかを、あなたが認められたなら、事情さえ許せばもとより大喜びであつたものとどまつてゐた筈のワイラントが、どれほど家路を急いだかを、あなたが観察されておれば、私たちの帰り道の模様はおおよそ想像できるでしょう。彼の思いは前へと進み、私のは後戻りをしました。》従つて、再会の希望は心のときめくものであつた筈である。第二回目の訪問はデュッセル (Düntzer) は十月終りか十一月初めと言ひ、フィーホフ (Viehoff) はクリスマスの休暇とみてゐるが、いずれもこの詩の別離とは関係がない。特に、冬であつたといういささかの根拠もこの詩からは見出せない。シュトラースブルク遊学の目的を達したゲーテが、フリデリーケのことを思い心を痛めつつ、終に、最後の訪問を敢行したのは、おそらく、一七七一年八月のことであるが、「詩と眞実」第十一章では次のごとく述べられてゐる。《私は今一度、フリデリーケに会うことをおさえることはできなかった。それは苦しい苦しい幾日かであつたが、この時の記憶は私には残つてゐない。私が馬上から彼女に別れの手をさしのべると、彼女の眼には涙があつた。そして、私の心は実に苦しかった。》^⑧こうして

みると、この詩の季節とゲーテの体験が中々一致しない。それにも拘わらずこの詩はもとよりゲーテの機会詩である。それはゲーテが、このゼーゼンハイム体験を、彼の眼前に不確定の像となって浮び上るままに、ドラマチックな一篇の抒情詩に作りあげたと見るべきである。喜びも悲しみも、すべての関心事を《一つの形象、あるいは、一つの詩に転化して、それによって自己を清算する》^①ゲーテの体験の文学である。ジンメル (G. Simmel) によれば、ゲーテの存在の根本形式は稀有の程度において、芸術的なものによって貫ぬかれていた。それ故にこそ、ゲーテにあっては体験と作品との間に、このように間然とするところのない関係が生じたのである。^②ゼーゼンハイムの体験全体が《歓迎》ではじまり、《別離》を以て終末を告げる、ゲーテにとっては比類なき喜びと悲しみの恋愛体験であった。そうすれば「歓迎と別離」という表題の持つ意義もまた極めて感動的なものとなるであろう。

さて、「歓迎と別離」この詩は四節から成り立っている。その Situation (場面) は Ritt (騎行)、Empfang (歓迎)、Abschied (別離) の三つであって、その間にいささかの停滞もない。それどころか飛躍と転回が一節毎に行われるのだ。この詩の四節は、巧まずして起承転結の理法にかなっている。第一節から第二節へと恋の情熱の虜となった若者の騎行の場面がつづき、第三節で一変して、予期にもまさる歓迎の場面、そして、第四節で、また一変して、早や日の昇ると共に迫りくる別離の場面が、この詩全体を結ぶのである。各節間も、各節の各行も、その描写は極めて躍動的であって、多彩である。その緊張と活気にあふれる、感動的なこの詩は、内面的必然に従って、フォルムを持たねばならなかった。従って、韻律はヤンブス (Jambus) である。各行共に強声が四つで、つまり、四脚であるが、韻脚の不完全な行 (katalektisch) がたがいに交錯する。

Es schlug mein Herz : geschwind zu Pferde !

Es war getân fast êh gedâcht.

Dêr Âbend wîegtê schön diê Êrdê,

Und an den Bêrgen hing diê Nâcht ;

Es schloß sein Herz : beschwied es Fiedels :
Der Abend wieses schon die Erde,
Und an den Isaren hieß die Nacht :

(ト) (ト) (ト) (ト) (ト) (ト)
(ト) (ト) (ト) (ト) (ト) (ト)
(ト) (ト) (ト) (ト) (ト) (ト)
(ト) (ト) (ト) (ト) (ト) (ト)

katalektisch は各節とも第一、三、五、七行である。押韻は各節共に一行おきに 馬—地、思—夜、櫟—ゲ—
sträuche, da—sa, Wolkenhügel—Flügel, hervor—Oh, Ungeheuer—Feuer, Mut—Glut, Freude—Seite, mich—dich, Frühlingswet-
ter—Götter, Gesicht—nicht, Morgensonne—Wonne, Herz—Schmerz, Erden—werden, Blick—Glück の形をとり、女性韻 (weib-
licher Reim) と男性韻 (männlicher Reim) が交替して行くのである。

この躍動して行くが、極めて単純な組立ての韻律と共に、この詩の自然もまた、動いたり、動かされたりしている世界
であって、純粋な力強い感情がこの詩全体に流れている。ここに、この詩を解釈する一つの鍵があるのである。ゲーテは
新しい言葉が必要としていた。シュトゥルム・ウント・ドラングの洗礼を受けたゲーテは、古い衣をぬぎすてたかったの
だ。同じゼーゼンハイムの歌にしても、例えば、「彩られたリボンにそえて」^⑧ (Mit einem gemalten Band) は表題からし
てそうであったが、快適、輕妙、纖細といったような言葉の連続であった。

Kleine Blumen, kleine Blätter

Streuen mir mit leichter Hand

Gute junge Frühlings-Götter

Tändelnd auf ein luftig Band.

《かわいい花とかわいい花びらを、やさしい若い春の神々が、軽い手つきで戯れながら、薄い私のリボンの上に撒きち
らす。》これはこの詩の第一節であるが、未だここにはアナークレオンの虚構が感じられる。また、同じく「ゼーゼン
ハイムの歌」の中から拾ってみても、Wir wollen kleine Kränzchen winden, / Wir wollen kleine Sträubchen binden. とか、

Zephyr^⑧ (擬人化された爽涼の南西風) というような生命を失った表現には若さがなかった。さかのぼれば、ゲーテは「ライプチツヒ歌集」(Das Leipziger Liederbuch)にあるような、悦楽的な、官能的な幻想と真実ならざる美の世界を払拭して、若さにあふれた、流出し、醗酵する世界を新しい言葉で歌い出したかったのである。「歓迎と別離」は、従来のともすれば、技巧と機智に走り過ぎた殻を見事にぬぎすてている。かつては、O Jüngling, sei weise, verweine nicht vergebens / Die frühesten Stunden des traurigen Lebens, / Wenn flatterhaft dich ja ein Mädchen vergift. と歌ったゲーテが、若々しく、清らかに、響き渡る歌の革命を起したのであった。「歓迎と別離」や「五月の歌」には、最早や、恋愛の遊戯はなく、感情の充実と内面的純粹さがあるのみである。シュトウラム・ウント・ドラングの先達ヘルダーがゲーテにこの方向において模範として示したものは、民謡(Volkslied)であり、オシアン(Ossian)、ホメール(Homer)、そして、シェークスピア(Shakespeare)である。ヘルダーの「オシアン論」^⑨は言う。《人間の魂の生んだ、最も強烈で、最もしっかりした娘であるべき詩が、最も不確実な、無気力な、移り気な娘に墮してしまった。詩はたくみに何度も筆を加えた児童や学校の宿題となってしまう。》^⑩このために、活気と真実と迫力を失った詩をいくらいじくりまわしても、魂の生んだ詩は生れてこない。古代民族の詩に充ちている精神、《荒けずりで単純な、しかし、偉大で魔法的な、荘嚴な特質、強い調子の言葉の一つ一つが与える印象の深さ及びその印象がつくり出される自由な措辞》^⑪ヘルダーはこれらを古代民族に具っている自然として着目したのであった。更に、ヘルダーは民衆の歌ほど《多くの飛躍と大胆な転回》^⑫を持っているものはないと言う。民衆の間で考えられ、発生し、生れた歌、それだからこそ民衆が非常な感激と熱情を以ってうたひ、うたうことを止めなかったのもであって、近代詩にとり入れたら、きつと読者を驚かさずにはおかぬような、それでいて、大胆で熱狂的なものと批難されるであろう民衆の歌こそは《飛躍と転回》^⑬にあふれていたものであった。この主張が若きゲーテの抒情詩の尺度に終止符を打たせ、かつてないこのような抒情詩を生み出したのである。トゥルンツはアナークレオンから民謡への移行は一つの極端から他の極端への転回であるという。

Dort Aufbau auf eine Pointe hin, hier gefühlsmäßige Reihung; dort Bewußtheit und Literatur, hier Stimmung und Gesang; dort Galanterie und Begehrlichkeit, hier Liebe und Innigkeit; dort die Beziehung auf eine begrenzte Gesellschaftsschicht, hier auf breite Kreise, vor allem schlicht empfindender Menschen.^⑭

ゲーテは、今、この「歓迎と別離」において、この転回を見事に果したのである。思えば、ホメールといい、オシアンといい、この二人の古代詩人の世界と、そして、ルソー、シェークスピアの世界が、シュトゥルム・ウント・ドラングのゲーテの詩の——この「歓迎と別離」の——精神的根源地であった。

「ゼーゼンハイムの歌」、わけても、「歓迎と別離」や「五月の歌」は、ゲッツやヴェルテルにも比較されるべき歴史的意義を荷っていたのであるが、これらはフリデリケとの恋愛によって花開き、実を結んだのであった。今度の恋愛は、ライプチヒの恋愛が料理屋と劇場との狭隘な雰囲気にとざされた恋愛であったのに反し、広々とした豊饒な自然、そこには神々の微笑があった、その自然を背景としての恋愛であった。つまり、このめぐみ深い風土は今度の恋愛の一要員であった。「歓迎と別離」のモチーフもここにあった。この詩が、《騎行》《歓迎》《別離》の三つの場面から成っていることは既に述べた。第一節、第二節では、怖ろしい夜を冒かしての騎行が描写されている。不可思議な愛の力と憧憬にあふれた衝動が、あえてこの冒険旅行を試みさせるのだ。自然が有情化されて、生けるが如く描かれている。Der Abend wiegte schon die Erde (夕暮は既に大地をゆすぶり) / An den Bergen hing die Nacht (そして、山辺には夜のとばりかかりぬ) / Schon stand im Nebelkleid die Eiche (かしわの樹すでに、霧の衣をまとって) / Ein aufgetürmter Riese, da (塔なす巨人のすがたして立つ) / Wo Finsternis aus dem Gesträuche (そのあたり暗き闇、繁みより) / Mit hundert schwarzen Augen sah (数百の黒き目をもて窺う) とか、第二節に至って、Der Mond von einem Wolkenhügel (月かげ雲の丘より) / Sah kläglich aus dem Duft hervor (狭霧さし、悲しげに覗いぬ) / Die Winde schlangen leise Flügel (風、軽き翼をゆりて) / Umsausten schauerlich mein Ohr (恐ろしく、わが頬のあたりに鳴れり)、このように、この自然は極めて造形的にとらえられて、全体の絵に有機的につながっているのである。しかも、この自然の絵の一こま一こまは動いているのであって、単なる絵画的肉体(Bildeib)ではない。ゲーテの感情はそのような固定したものを必要としなかった。彼はその動きつつある自然を直ちに、音声的肉体(Klangleib)と化することができたのである。何となれば、《ゲーテは形成しながら形成するものを体験し、すでに歌いながら音声的肉体として体験したからである。》^②ゲーテの新しい詩は世界を《振り動くものとして、呼吸するものとして、成熟したり、枯れしぼむものとして、せき立てるもの、高まるもの、活動するもの、織り成すもの、風に翻るもの、わき出るもの、流れるもの、たゆまず志向するものとして、つまり、捕え難く

動くもの、絶えず動きの中にとらえられたもの^②として見たのであった。ゲーテは最早、存在という永遠に静止した、無時間的世界やその世界の個々の現象をとらえようとするのではなくて、活動している世界をとらえようとしたのである。それ故に、例えば、彼は愛人の形姿をしつかつかむために、あるいは、その愛人について、自己の感情を語るために、彼の愛人を歌うのではなかった。彼は自己の内的並に外面体験の対象を彼の魂の潮流の波立ちとして取扱ったのである。それがために、ゲーテは新しい言語の創造を必要とした。新しい世界の魂に対して唯一適合した肉体として働く言語を必要としたのだ。

さて、冒頭の二行は、ヘルダーの民謡歌集の中の「病氣の花嫁」^③ (Die kranke Braut) の第一節を思わせるであろう。

Durchs Birkenwäldchen,

Durchs Fichtenwäldchen

Trug mich mein Hengst, mein Brauner,

Zu Schwiegervaters Höfchen.

馬で愛人の許へ急ぐ若者のモティーフは、ヘルダーの民謡歌集のリトワニアの歌に出てくるモティーフであった。Die Nacht schuf tausend Ungeheuer (夜は幾千の怪物を創れり) は、シェークスピアの「真夏の夜の夢」の空想にあふれる叙述を思わせないだろうか。ゲーテがこの二人の先達に学んだことは当然のことであっても、一度、ゲーテを通過すると言葉は魔物のように生きてくるのである。この詩における動詞は全部過去形であって、「五月の歌」が全部現在形であったのと、するどい対照をなしている。「五月の歌」が今動きつつある喜びを表現した詩であるとするならば、「歓迎と別離」は喜びと悲しみを以て終末を告げたゼーゼンハイムの体験を歌うのである。第一節、第二節においても schlug, wiegte, hing, stand, sah, schwangen, schuf, war の持つダイナミックな情熱的な響きに注目したい。と同時に、複合語による力強い効果も見のがしてはならない。Nebelkleid, Wolkenhügel, aufgetürmter, hervorsah, unsausten, などはそれである。シュトゥルム・ウント・ドラングのゲーテの詩、例えば、フリデリーケの最も美しい心の奥底を傷つけて、後悔し思いなやむ時期に作られた「旅人の嵐の歌」^④ (Wandrer's Sturmlied) の中から拾って、Regengewölk, Schloßenturm, entgegen-singen,

Schlammfad, Feuerflügeln, Blumenfüßen, Flutschlamm, unterspreiten, Hüterfittchen, Mitternacht, Schneegestöber, wärmumhüllen, umschweben, göttergleich, zurückkehren, hellleuchtend, unwärmend, umkränzende, mutlos, Jahrhundert, Seelenwärme, Mittelpunkt, entgegenglüh, Fürstenblick, vorübergleitend, neidetroffen, Nebenbach, Ulmenbaum, Taubenpaar, blumenglücklichen, sturmatmende, Pappelwald, Sonnebeglänzter, blumensingenden, honigfallenden, siegdurchglüheter, Peitschenknall, Kieselwetter, canariの数のにのぼるこの複合語が感情の嵐の表現でもあったことを思い合す必要がある。元来異質であるべき、名詞や形容詞を自由な連想によってこれを融合し一語に造りあげるのにはゲーテの新しい言語の一つの特色であった。第一節、第二節は若者が馬を急がす自然の景觀が、あたかも、自然の方から歌い出すような概を呈するのであるが、そのモチーフを支えるものは、Abend, Erde, Bergen, Nacht, Nebelkleid, Eiche, Finsternis, Gesträuche, Mond, Wolkenhügel, Duft, Winde, Ungeheuerなどである。この自然が一つ一つ言葉を発して、歌い出るようである。シュタイガー^⑤ (Staiger)の言うように、そこには主観と客観との距りがなく、詩人の言葉と自然との、更に言えば、内容と形式との対立も解消して、両者が共鳴し合っているのだ。これは《自然との関係において、最も恵まれた天性を有し、外界の一切のものを美的に享受し、一切の現実を同時に美として感受し得た》^⑥ゲーテにして、はじめて可能であったのである。wiegteは慈母のように、寝ぼけた大地をゆすって、まどろみにつかせることであり、hingは夜が帳と考えられての発想であり、im Nebelkleid (霧の着物)とは霧にすっぽりつまれた意である。ein aufgetürmter Rieseは、元来静的なるものを動的なものに転化するゲーテの用語法の一つである。ゲーテは現在分詞や過去分詞を独立した形容詞として使用し、客体に積極的な動きを移入するのである。例えば、schwebende Sterne (浮ぶ星々) türmende Ferne (そびえ立つ彼方) beschattete Bucht (かげになった入江) reife Frucht (うれた麦) heimlich bildende Gewalt (ひそかに形づくる力) heilig glühend Herz (神聖に燃える心)の類いの一つである。《暗き闇、繁みより、数百の黒き目をもて窺う》は暗き闇にさえぎられて、繁みの中は、何一つ見えなからであった。そして、《月の丘》の上にたたずむ月の意を Der Mond von einem Wolkenhügel と表現したのである。kläglich はかすかにもれる月の光に人間的感情を移入して用いられた用語で《悲しそうにのぞいていた》となる。このsah... hervor であるが、ゲーテは動詞や形容詞に、方向の前置詞や副詞を付け加えることによって、積極性を持たせようとしたのである。例えば、Berge wolkig himmelan, grüne herauf, herzaufquellende Träne, anglühen, durchglühen, entgegen-

beben, entgegenkeimen, nachquellen, vorbeiquellen, entgegenschäumen, entjauchzen などの一つである。Duft は Nebel のことを詩語でそう言う習しであり、風が翼を持っているという発想は平凡に似て非凡である。《夜が幾千の怪物を創る》というのは「ジブシーの歌」(Zigeunerlied)^⑧や「魔王」(Erlkönig)^⑨にもあるモチーフである。第二節の最後の三行に至って、しかし、私の心はさわやかで楽しかったと言っているのは、焰となり、火と燃える愛の力があつたからである。Doch... 以下は verzehrend, zerfloß などが省かれて改作されたことは既に述べたが、情熱のこもった感動的表現である。

第三節は一転して《歓迎》の場面となる。第一節、第二節が自然を有情化して、見事な客体描写をなしたとすれば、第三節は積極的な主体描写である。die milde Freude, dem süßen Blick, mein Herz, Atemzug, ein rosenfarbnes Frühlingswetter, das liebliche Gesicht, Zärtlichkeit, Götter などが《歓迎》のモチーフをつくりあげている。こゝでもまた、過去形の動詞と複合語が用いられて、緊張の持続と感情の高翔を助けている。前者は sah, floß, war, hofft, verdient であり、後者は Atemzug, rosenfarbnes, Frühlingswetter, umgab である。こゝで言う milde は《やさしい》とか《親切な》という意味ではない、中世ドイツ語でそうであつたように、gütig spendend (物おしみしない) とか reichlich mitteilend (ゆたかにあたえる) の意であつて、ゲーテの「言葉」(Sprache)^⑩の第四行目に Greif milde drein... とあるのは、Greif mit vollen Händen drein の意であるのと同様である。rosenfarbnes Frühlingswetter (ばら色の春めける気色) という表現は造形的にとらえられた言葉であるが、単にばら色の頬という時の《ばら色》ではなくて、こゝは当然、rosenfarbiges Licht とか rosenfarbige Laune と言う場合のように、ein heiterer Glanz (はれやかな、明るい輝き) の意である。ihr Götter は喜びの歓呼の声である。ゲーテがしばしば好んで用いる言葉だ。第四節最後の行に再びあらわれる。なお、この第三節には感覚に訴えてくるような修飾語を用いて、von dem süßen Blick (あまい眼差しから) としているのは、シェークスピアに学んだゲーテの手法である。シュウトウム・ウント・ドラングのゲーテは、異様とさえ見える言葉の結合によつて、言葉の領域を広げ、弾力性を与えて、言い知れぬ情感を呼び起すことに成功した。例えば、der böse Schlummer (意地わるいまどろみ) eine süße Träne (あまい涙) umkränzende Seligkeit (花輪で飾る幸福) gier'ger Sand (どん欲な砂) などとはそれである。

第四節、歓迎の夜は早や過ぎ去り、暁の曙光と共に別離の時が訪れる。長い恋愛体験を一夜の出来事に圧縮したのは、

その詩的効果を高めるのに役立っている。これをアナークレオン調の「別れ」^② (Der Abschied) と比較してみよう。その第二節、第三節は次の如くである。

Traurig wird in dieser Stunde
Selbst der Liebe süßtes Pfand,
Kalt der Kuß von deinem Munde,
Matt der Druck von deiner Hand.

Sonst, ein leicht gestohlnes Mäulchen,
O wie hat es mich entzückt!
So erfreuet uns ein Veilchen,
Das man früh im März gepflückt.

フリデリケに対する愛の深さに較べられない《別れ》ではあるが、それにしても、迫真性の乏しさはどこからくるのであろうか。韻律はトロヒーウス (Trochäus) で、女性韻と男性韻が一行おきに交錯しているのだから、その調子は重々しい、物思いにしずんだ調べである。にも拘わらず、「歓迎と別離」の第四節の精神的躍動とは、かなりはなれた情感を呼び起すのはなにか。これこそは、ゲーテのアナークレオンとの訣別でなくて何であらう。^③ シェーラー (Wilhelm Scherer) は、「歓迎と別離」はシュトゥルム・ウント・ドラングの新しい表現として《劇的躍動》があるといった。^④ まことに、愛の根源現象がかくも無造作に、かくも感動的に他のどこにおいて述べられているであらうか。この感動をもしあげる効果を挙げているものは、*verengt, ging, standst, sahst* という過去形の動詞であり、複合語 *Morgensonne* である。 *Verengt der Abschied mir das Herz* というのも非凡な言い方である。特に、*verengt* (せばめた) という表現は《わが胸をしめつけた》の意であらうが、イーリス誌では *Der Abschied, wie bedrängt, wie trübe!* とあったものを改作したものであって、このことは先に述べた通りである。イーリス誌では次の第二行目が *Aus deinen Blicken sprach dein Herz* となっていたが、これは先に挙げた「別れ」の第一節最初の二行に對し、

Laß mein Aug den Abschied sagen,
Den mein Mund nicht nehmen kann!

古い衣をぬぎ捨てて、すっかり新しい装いにしたのである。 Welche Wonne, welcher Schmerz の対比は、《君が口づけ

に喜びあふれど、君がまなざしに悲しみ宿れり」と対照的な二行を並べたのであって、別離の本質をこの二行で言いつくさんとしている。Wonne は《無上の喜び》の意であり、Schmerz (傷心) と鋭く対立する言葉である。sahst ... nach の方向をあらわす nach が sahst の動きに積極性をあたえていることは既に述べた。最後の二行の解釈には、平凡、非凡をめぐって、意見のあるところである。そもそも、フリデリーケはゲーテの魂の憧れの港であって、彼はそこに帰ることを欲しながら、結局は外洋の広さを求めざるを得なかったのである。つまり、彼の天才は自己を創造するために、フリデリーケを求めたのではあったが、天才児の創造につき得る實在の女性が存在し得るであろうか。天才は犠牲を要求するのである。ゲーテは、《私は最も美しい心を、その最も深い所において傷つけた》^⑤と言っている。この悲しみの涙と同時に、思えばゼーゼンハイムの恋の何と清く美しかったこと。この二行は喜びと悲しみをこえて、愛の根本現象がさりげなく歌われているのだと思う。その時この結句の持つ意義が恋の《別離》に相応わしいものになってくる。ゲーテがいかなる激情の中にあっても、その全体的生命を見失うことがなかったしとしてもこれは貴重である。トゥルンツは、この二行の間におかれた Götter に着目して der Hinweis auf die Instanz, zu der jede große Liebe in tiefster Beziehung steht^⑥と言っている。第三節七行目の ihr Götter と共に極めて効果的である。第五行、六行目の旧稿との相違は前述の通りであるが、フリデリーケに対する自責の念の描写としては旧稿の方がまさるという見方があるが、それは当然であって、それだけまた、異様なとらえ方であったと言える。

シュトゥルム・ウント・ドラング時代は天才時代であった。啓蒙期の文学が外からあたえられたノルムを信奉していたのに反して、天才時代の文学は内面的必然性に従って、創作しなければならなかった。ゲーテは晩年においても「若き詩人たちになお一言す」(Noch ein Wort für junge Dichter)の中で、《詩的内容は自己の生活内容であって、何人もこれに諸君に与えることはできない。……諸君は今では實際何等のノルムを持っていないが、諸君は自らにノルムを与えなくてはならない。諸君は諸君の詩の一つ一つにたずねるがよい。その詩が果して諸君の体験であるかどうかを。そして、その体験が諸君を促進しているかどうかを》^⑦と言った。この意味において「歓迎と別離」はその歴史的意義を荷った詩であり、ここにおいては、かつてあった象徴と心の波立ちとの間の間隔は止揚されて、この詩の一つ一つの言葉がゲーテがそれによって揺り動いた運動を暗示しているのである。

註 ① Houston Stewart Chamberlain : Goethe, 1932, S. 34 参照。 ② 例えば Boucke, Heuwers, Staiger など 1771 年春、Dünzert 1771 年夏と推定している。 ③ H. Baungart : Goethes lyrische Dichtung 1. Bd, 1931, S. 64ff. 及び Goethes Werke, Hamburger Ausgabe Bd. 1 S. 422 の E. Trunz の註参照。 ④ Heinrich Guntzer : Goethes lyrische Gedichte 4, 1896, S. 142 ⑤ H. Baungart : Deutsches lyrische Dichtung 1. Bd. S. 86 ⑥ Goethes Werke, Hamburger Ausgabe Bd. 1 S. 425 参照。 ⑦ Ibid. Bd. 9. Dichtung und Wahrheit 11. Buch S. 452 ⑧ ゲーテのカタリーナ・フョブリーチウス宛の 1770 年 10 月 14 日付の手紙は、彼がフリデリケを始めて訪問したことを次の如く報じている。《私はここ数日間田舎のまことに愉快な人々のもとで過しました。その家の愛らしい娘たちとのまじわり、美しい風景、とても気持ちよい大空、それらは私の心に眠るすべての感情、私の愛する一切のものに対するすべての思い出をめぐめさせたので、私は着くか着かないうちに、すでにここに坐って、あなたにお手紙をしてゐるのだ。》Max Morris : Der junge Goethe 2. Bd. 1910, S. 15 参照。 ⑨ Ibid. S. 16 ⑩ Goethes Werke, Hamburger Ausgabe Bd. 9. Dichtung und Wahrheit 11. Buch S. 500 ⑪ Ibid. 7. Buch S. 283 ⑫ Georg Simmel : Goethe 1913, S. 18 参照。 ⑬ Goethes Werke, Hamburger Ausgabe Bd. 1. S. 25 ⑭ Ibid. ⑮ Ibid. S. 26 ⑯ Ibid. S. 20 ⑰ Herder : Auszug aus einem Briefwechsel über Ossian und die Lieder alter Völker ⑱ Ibid. ⑲ Herders Werke, Meyers Ausgabe 2. Bd. S. 40 ⑳ Ibid. S. 38 ㉑ Ibid. S. 44 ㉒ Goethes Werke, Hamburger Ausgabe Bd. 1. S. 423 ㉓ Friedrich Gundolf : Goethe, 1922, S. 102 ㉔ Ibid. S. 100 ㉕ Herders Werke, Meyers Ausgabe 2. Bd. S. 141 ㉖ 1772 年春の作、ゲーテはシュトラースブルクからフランクフルトに帰つて来たが、フリデリケに対する自責の念にかられて、よく山野を跋渉した。人は彼を「旅人」(Wandrer)と呼んだ。このことは「詩と真実」第十二章に詳細出づる。 ㉗ E. Staiger : Goethe Bd. 1. 1952 参照。 ㉘ G. Simmel : Goethe S. 2 ㉙ 1771 年十一月にゲッツ初稿の第五幕のはじめに入れる歌として作られた。 ㉚ 1772 年七月、ティエフルトで上演された唱歌劇「漁婦」の最初にうたわれた歌。 ㉛ Goethes Werke, Hamburger Ausgabe Bd. 1 S. 425 参照。 ㉜ Ibid. S. 63 ㉝ 1770 年、ゲーテがシュトラースブルクへ出発する前に、ゲーテとその妹との友フランツィスカ・クレスベルに宛てたもの。 ㉞ H. A. Korff : Geist der Goethezeit II. Teil S. 194 参照。 コルフは「五月の歌」についてそのような表現をしている。 ㉟ Wilhelm Scherer : Geschichte der deutschen Literatur 1928, S. 373 ㊱ Goethes Gedichte von E. Staiger I. Bd. S. 37 ㊲ ヘルダーの二行を平凡だと言つたが、シェラーやマッテルンツはこれを価値づけてゐる。 ㊳ Goethes Werke, Hamburger Ausgabe Bd. 9. Dichtung und Wahrheit 12. Buch S. 520 ㊴ Ibid. Bd. 1. S. 424-5 ㊵ Emil Ermatinger : Die deutsche Lyrik in ihrer geschichtlichen Entwicklung von Herder bis zur Gegenwart Bd. 1. S. 112ff. 参照。 ㊶ Goethes Sämtliche Werke Jubiläums-Ausgabe 38. Bd. S. 325ff. (備考) 以上の註以外の主な参考文献 Benno von Wiese : Die deutsche Lyrik I, 1956 ; Emil Staiger : Die Kunst der Interpretation 1955 ; Wolfgang Kayser : Das sprachliche Kunstwerk 1948 ; H.A. Korff: Goethe im Bildwandel seiner Lyrik 2. Bde. 1958.